キズナエピソード

及川依子　1話

//ヴィジュアルノベル形式開始

悪魔どもとの激しい戦いに勝利した俺たち。

戦闘中、大事なところで攻撃を外してしまった依子が

急に悔しがり始めた。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

［黒猫］

「おい、どうした？　大丈夫か？」

［依子］

「あー！　はがえぇー！」

［黒猫］

「……！」

［黒猫］

「お、おい。今、なんて？」

［依子］

「ん？　あ、ごめ～ん！

イコ、つい方言が出ちゃった。てへっ？

今のは、ムカツク～、って意味」

［黒猫］

「……そうか。

まぁいい、さっさと行くぞ」

//ADV形式終了

//暗転

//場面転換：白い部屋

//ヴィジュアルノベル形式開始

白い部屋に戻って来た俺は、感慨深くため息を吐いた。

「あー！　はがえぇー！」

この言葉に強い既視感を覚える。

まるで学生時代の青春の匂いが思い起こされるような、

そんな感覚……。

そんな時――

//ページ切り替え

突如として、俺は耐えがたい睡魔に襲われる。

視界がぼんやりとしたモヤに包まれる中で、

俺は知りもしない記憶を垣間見た。

それは、とある休日……。

その時の俺は、友だちに誘われてアイドルのライブに来ていた。

//暗転

//ライブ会場

色とりどりの光に照らされたステージ。

カワイイ衣装を着た女の子たちが歌い、踊る。

一生懸命で、楽しそうで、ファンを楽しませようと頑張っていて、

ちょっとミスがあったりはしたけど、それはそれで面白くて。

アイドルのライブを見たのは初めてだったが

会場とアイドルが一体となって織り成す雰囲気に、

俺は感動していた。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

［友人］

「いやぁー、良かった！　今回もグンバツに良かった」

［とびお］

「そうだな。初めて来たけどライブって楽しいんだな！」

［友人］

「そうだろそうだろ！　くぅー！

やっぱ現場最高だわ！」

［とびお］

「……で、ちょっとごめん。

トイレに行きたいんだけど、いい？

水分補給しすぎた」

［友達］

「行って来い、行って来い。

俺はもう少しここの余韻に浸ってたいから、

その辺で待ってるわ」

［とびお］

「おっけー。すぐ戻るわ」

//暗転

//ライブ会場・廊下

［とびお］

「はぐれてしまった……」

［とびお］

トイレが混んでいたせいで時間がかかってしまい、

戻ってきたときには会場へは

撤収作業で入れなくなっていた。

［とびお］

友達を探して建物内をうろついてみたのだが、

似たような人が多い上に、服装も同じ物販Tシャツ。

あっちこっち巡った末に、迷子になってしまう。

［とびお］

電話で連絡を取ろうにも繋がらない。

ライブのマナーだとスマホの電源を切っていたが、

まだ切ったままなのだろう。

［とびお］

「仕方ない。自分の勘を信じて進むか。

どうせ、人がいなさそうなとこで休んでいるだろ」

//暗転

//ライブ会場・裏手側

［とびお］

そうしてたどり着いた先は、建物の裏手側だった。

いつの間にか関係者通路のような場所に来てしまったらしい。

そこは1人だけ先客がいた。

［依子］

「あー！　はがえぇー！」

［とびお］

そこにいたのは、

少し前までステージで踊っていたアイドルだった。

［依子］

「なんであそこでけつまづくんじゃー！

あー、ウチのばかたれー！」

［とびお］

怖い言葉を使いながら、地団駄を踏んでいる。

これはもしや、いけないものを見てしまったのでは。

［とびお］

厄介事に巻き込まれる前に離れよう。

……としたのだが、そこで俺のスマホが着信した。

友達からだった。

［とびお］

「あいつ、今頃になって……！　間が悪すぎる！」

［依子］

「あぁん？そこにおるんは、誰じゃ！」

［とびお］

「ひ、ひいぃっ！」

［とびお］

当然のことながら、見つかってしまった。

彼女は鬼神のごとく駆け寄ってくると

俺の手からスマホを奪い取り、通話拒否ボタンを押す。

=========================スチルカットシーンA開始=========================

［依子］

「おう……ワレ。スマホでなんしとったんじゃ？

……まさかウチのこと、盗撮しよったんじゃろーが？」

［とびお］

「ち、違うって。友達を探してたら道に迷って……。

そしたら、友達が電話をくれたから出ようとして……。

だから、何もしてないって！」

［とびお］

必死で弁明するものの、

俺を疑う目つきに変化はなかった。

すると突然、俺のスマホを操作し始める。

［依子］

「ええけぇ、早よ、よこせぇやぁ！！」

［とびお］

「な、何を！？」

［依子］

「とびおって言うのね……。

おい、とびお。オドレの連絡先、控えたけぇ、

今のこと誰かにバラしたらアイドルパワーで……沈める」

=========================スチルカットシーンA終了=========================

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル形式開始

有り体に言えば、脅迫。

それが、俺とアイドル・依子との出会いだった。

ステージ上とあまりにもかけ離れていた言動に、

正直本当に本人なのか疑ったくらいだ。

でも、たしかにあの瞬間、俺の胸は強く高鳴っていた。

それは決して、恐怖や不安からくるものではなかったように思う。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//1話END